

今年のノーベル医学生理学賞に選ばれた大隅良典東京工業大学名誉教授は、受賞後の記者会見で、自身の受賞の喜びを語ると共に、“社会が基礎研究の重要性を認識してくれるようになってほしい”との希望を述べています。そして、“分かったようで何も分かっていないことが、生命現象にはたくさんある。それを解明するためには、たとえ実際に役立つのは10年後、あるいは100年後かもしれないけれども、若い人たちが「えっ、なんで？」ということを実に大事にして、自由に研究を進められる環境を作ることが大事である。自分へのノーベル賞が意味を持つとすると、そういう自由な研究環境を作ることに役立つことだ”と、若手研究者育成の重要性を言われています。

2012年に同じノーベル医学生理学賞を受賞した山中伸弥京都大学教授も「研究は、最初から社会に役立つようにしよう意識しすぎると浅いものになるし、みんなが実用化間近の研究ばかりやりだすと、将来のイノベーションの芽が摘まれてしまう。海のものと山のものともつかない研究を支援する仕組みが、国全体の技術力を維持するうえで非常に大切です」と述べています。

親神が創造されたこの世界には、人間には分かっていないことがまだまだたくさんある。“全て分かった”などというのは分かっていない人の言うことであり、山中さんや大隅さんのように本当に分かっている人は、まだほとんど何も分かっていないことを認識しています。ですから、目先のことばかりを考えずに、基礎的な研究をすることが大事である。その為には、多くの若い研究者が自由に研究できる環境を作ることが大事だと言われるのです。

そして、このことは、我々の教学研究の上にも言えることです。教内の一部には、“本教の教学はすでに十分に整備された。親神の教えの全貌はほぼ明らかになった”などと考えている人もいます。そして、“教学研究などは理屈を言うだけで、信仰にはかえって邪魔になる”などと言う人もいます。しかし、そのような言説は、教学研究のことを全く分かっていない人のものなのです。

教学研究は、親神の言葉を理知によって批判しようとする営みではありません。それは、歴史の中でその時々状況に応じて示された真理の普遍的な理解を可能にするために、“知恵の仕込み”として授けられた理知を活用しようとするものです。それは、親神の教えを正しく理解しようとする営みであり、それぞれの時代の信仰に活力を与えて揺らぎ無きものにする努力なのです。

教学のない信仰は、宗教的理想への道を閉ざし、教団・教会・信者をして、目先のことしか考えない御利益信仰に迷い込まず懸念があります。個人の信仰さえ強化されれば、それによって社会も自然に教化されるというのは、個人の行動に影響している社会の力を過小評価した考えです。カリスマ性を磨いての個の力に頼った布教・伝道をするだけでは、信仰を伝承し永続性を持たせるのに限界があります。日本文化の殻を付けたままの伝道では、日本に興味を持つ一部の人たちしか相

手にできず、異文化圏の大衆一般を教化することはできないのです。

「神の道には論は要らん。誠一つなら天の理。実で行くがよい。」(22/7/26)

という「おさしづ」は、“議論で相手を屈服させるのではなく、真実の心で接せよ”ということであり、教理の不要を言われているものではありません。相手の状況に応じた布教・教理展開をするのが、“実で行く”ことなのです。

また、筆者の父忠政が「大乘仏教没落を教義の煩瑣にありという説には耳をかたむけなければならぬと思うが、現在われわれの直面する事態は、素材の純化体系化という問題が重点であり、煩瑣を考慮せねばならぬのは、いつの日であろう」(『天理教教義学序説』18頁)と40年前に言っていますが、“煩雑な教理論で信仰の本質が失われる”と言うには程遠いのが、今も変わらない本教の教学研究の状況なのです。

大隅氏は、“生命現象には分かっていないことが沢山ある”と言っていますが、その生命現象の元である親神様のお働き、教え・お言葉の理解においても、“よく考えればこれはどういう意味だろう”と深く考えれば、実は分かっていないことがたくさんある。そのことを思えば、親神が教えられているのに我々が全く気付いていないことが多くあることも、疑いの余地がないと思うのです。

「おふできき」に、

このよふのものはじまりのねをほらそ

ちからあるならほりきりてみよ

五 85

とありますが、神意の根源に迫るには、大きな力が必要です。

世相を見ても、教勢を見ても、この世の元初まりの根が現れているとはとても言えない状況ですが、“ねをほりきる”ためには、ノーベル賞級の教学研究をいくつも連ねるような努力が必要なのです。

しかるに、一方、「おさしづ」に、

押して、たゞ今おさしづを承りし處、今度中西牛郎に十二下り解釈を致させて居りますが、この件に掛かりますや願

「さあ〜 どのような事もこういう事も、皆あちらでもこちらでもする。これが誠や。それ〜 出て来る。連れ戻つたる。怖わいと云うて来るものやない。皆肥や。どんな者もこんな者も、年限の内に立ち寄る。金銭出したとて雇われん。」(33/5/31)

とあるように、教学研究を担う者は、外から雇い入れることができません。ですから、お道で生まれ育った人材をあちらこちらから大勢見出して、彼らが「えっ、なんで？」という自由を担保して、年限をかけて育成する必要があるのです。

教祖130年祭を終えた今こそ、もう一度このことを再確認して、20年後の立教200年に花が咲き、70年後の教祖200年祭に実が結ぶような教学の基礎研究ができる態勢・人づくりを、抜本的に考える時だと思えます。そして、筆者もまた来世に生まれかわった時に、その教学研究の一員に加えてもらえればありがたいと思う次第です。